Japanese Journal of Applied Psychology
1985, No. 10., 17-31



応用心理学研究の歩み

応用心理学会と知友の輪
——つずら折り行50年——

JAPANESE APPLIED PSYCHOLOGY ASSOCIATION AND MY FRIENDS AND CO-WORKERS
—Fifty Years' Reminiscences—

児　玉　　省*
Habuku KODAMA

序：応用心理学会の雑誌に，編集の正田さんから自分のしてきた研究のことを書けというお話があった。妙な謙遜をしたくもないし，そうかといって大したことをしてもいないのに，並び立てておこがましいじゃないかという気もした。そこで自分のしてきたことを出来るだけ学会や団体や知人友人に結びつけて，この人達を一緒に並べることによって，歴史的，場面的意味を持たせようと思った。これが本稿である。

日本応心の伝統と行き方

シカゴで勉強したこと：僕は東京外語を出て，大阪毎日新聞に4年半位つとめてからシカゴ大学に行った。そしてシカゴ大学哲学科を出たのが1925年丁度60年前。それから大学院で心理学を専攻した。哲学科には G. H. Mead 先生があり，心理学には H. Carr 先生その他がおられたが，大学院では特に興味をひかれたのが猿の脳の研究で localization に新生面を開いた Lashley 先生。神経学の Herrick 先生などであった。エール大学から客員教授できていた Angier 先生の生理心理学の講義と Angier 先生から教わった英国の神経生理学者 Sherrington や Adrian などの研究が面白くて，「連想作用の生理学的基礎」という論文を書いた。今から見れば児戯に等しいものであったろうが，これを戦後の日本心理学会復興第一回会議で発表した（1947，昭和22年）。この時の発表をきいていた一人に小保内虎夫君がいた。僕も小保内君の発表をきいていたら，何か似たようなことをいっているのに気がついた。後で会って話をしたことを覚えている。後に小保内君が亡くなってから金子隆芳氏と彼の英文の本 Perception, Learning, and Thinking を出す手伝いをすることになった機縁であった。

学際的応心滑り出す：筆者の第一回発表は日心になっているが，復興応心は日心より一年早く昭和21年(1946)に復興第一回会議を開いている。戦前の日心は昭和2年，応心は昭和6年に創立されたが，応心には特別の主張があった。創設者は日大の渡辺徹，教育大の田中寛一，東大（後で立大）の淡路円治郎氏らで3つの主張をもって設立された。(1) 会員を心理学専攻者に限らないで広い分野からの参加を求める。(2) 会長を設けないで平等の立場で研究を行う。(3) 持ち廻り会場の世話は当番制で行う。大会の開催を年2回行う，ということであった。戦前応心は昭和16年6月の第17回大会で活動を停止したが，戦後は前記3教授の骨折りで昭和21年3月17日復興応心第1回大会が開催された。そして毎月神田三崎町の日大心理学研究室で研究会が開かれた。会員が全国的に増えるにつれて，日本応用心理学会が組織された。

渡辺徹先生：渡辺徹先生という人は非常に個性的な明治人であった。その生活と勉強振りがいまだに眼に焼きついて残っている。当時の日大の教室には渡辺先生のほか田中先生小保内君植松正君大村君後で山岡君などがいたが，先生はこれらの人を君づけか呼びすてという調子であった。この人が権力嫌いであったのはまことに印象的なことであった。先生は休日を含めて毎日研究室に顔

* 日本女子大学名誉教授，児玉教育研究所，応用心理学会名誉会員，文学博士，1896生
Emeritus Member, the Japan Association of Applied Psychology : Ph. D. ; Born 1896.

を出した。僕はその休日に出かけては話しこんだものである。何かこの人と話をすることに魅力があった。ある日旺日に女子学生に来るように言っておいて顔を出さないことがあった。この時，昭和32年１月12日肺炎で亡くなった。

心理学講座出版：僕は応心の雰囲気に一層引き込まれて行った。そして復興第４回目の大会を日本女子大で開いた。日本応心のことについて語ることがいろいろあるが，そのうち最も重要なのが昭和28年，日本応心が心理学講座12巻別巻一冊を出版したことである。これ位，先に書いた応心の目標とその行き方を，時代的な感覚に合せて編集されたものは日本では余りないと思っている。編集者は小保内虎夫（教育大），懸田克躬（順天堂大），児玉省(日女大)，相良守治(東大)，杉靖三郎（教育大），戸川行男（早大），林髞（慶大医），宮城音弥（東工大）の８名であるが，医学畑が３～４名入っている。宮城氏は医心の両刀使いであった。また執筆者にもあらゆる分野の医学者が参加し，その他文学，社会学，文化人類学，工学，理学畑の人も網羅してそれらの人が皆張りきって執筆をしている。巻数をみてもⅠ．現代心理学，Ⅱ．心理生理，Ⅲ．発達心理，Ⅳ．知覚心理，Ⅴ．学習心理，Ⅵ．情意心理，Ⅶ．臨床心理，Ⅷ．保健心理，Ⅸ．心理測定，Ⅹ．社会心理，Ⅺ．経済心理，Ⅻ．文化心理，別巻：総索引となっていて，今日的発想と余り違わないことが分る。内容も同様である。

筆者は日本でこれ位総合的な心理学双書をみたことがない。渡辺先生らが考えた応用心理学の意味の実際的結実とみていいであろう。本は巻ごとよりテーマごと分冊で出版されたが，出るや否や忽ち３版４版を重ねるという盛況で昭和28年スタートし，29年夏前に完結した。心理学講座に筆者は第七巻臨床の巻の中でロールシヤッハと MMPI のことを書いた。ロールシヤッハについては日本女子大の研究室で集めた800名位のデータからＰ反応一覚表その他の基準的な資料を提案して，後で各方面の研究者から参照されることになった。MMPI は日本では始めて紹介する文献になった。進駐軍関係の心理学者に知己があって彼から資料を得ることが出来た。1951年に渡米した時，原著者 Hathaway 教授にミネソタ大学で会って日本の資料をみせて一緒に検討した。あっさりした気持のいい人であった。そして日本で慶応の医学部の塩入博士などと日本の対象を使って研究を行った。しかしやっているうちにデータ処理のプロセスに無理があるように思われて段々使わなくなった。

交通対策運動：応心ではよく研究者が一体となって時代的な要請のあるテーマに取り組んだ。その一つは交通問題対策であった。この時は警視庁，警察庁，科学警察研究所等に問題を持ちこんで一また持ちこむようにさせて，みんなで一体になって研究を行った。心理学講座刊行がすんだ後で**交通委員会**（委員長中村弘道氏）の人達は警視庁やタクシー営業所に行って調査をしたり，テストをした。警視庁では優良運転手（２カ年間無事故）百名と重大事故運転手百名を呼んでもらって，庁内でテストをし面接調査をした。時には事故多発の原因を求めて，大和，日の丸その他の自動車会社に赴いたこともあった。警視総監が出て挨拶された。そして，総監に御飯をごちそうなどになったことがある。昭和21年秋の応心大会は大脇教授が主催者で東北大学で行われたが，筆者を含め交通問題の発表が並ぶ交通対策問題大会のようであった。学会はこういう協力関係で，科警や警視庁などに学会関係の人を入れてもらったこともあった。学会には当時四部会あり，交通部会のほか**教育心理部会**が中野佐三氏，**産業部会**が桐原葆見氏，**犯罪部会**が小熊虎之助氏，**臨床部会**が鈴木清氏であった。交通部会には元国鉄のち阪大の鶴田正一さん，立大の豊原さんら論客が多かった。結城錦一君も必らず発言した。

カウンセラー設置問題：学会第３の仕事は学校にカウンセラーを設置する運動を起こしたことである。学校に問題が多いのに鑑みて，これを心理学的立場から処理指導する人が必要であるという主張をかかげて，運動を始めた。結局決議としての，立法措置が必要であるということになって，運営委員は手別けをして関係代議士の所を廻ったことを覚えている。この立法化ができたのは昭和？年(思い出せない)であると思っている。

村松博士大共同研究を組織

村松常雄博士（当時名大，後精神衛生研究所長）が応心の心理学講座が完結しない前，昭和28年に医心合同の一大共同研究を提唱組織した。名大の精神医学教室のほか，阪大，金沢大，慶大，順天堂大の精神科と国立精神衛生研究所の精神科の人たち，これに心理学からは名大，京大，東京教育大，早大，日本女子大，横浜国立大の心理学者を動員統合して，文部省の科研費を獲得し，医心としては最大の学際的研究組織であった。目的は博士の言葉を借りれば，「従来各研究者が各個ばらばらに検討を進めていた心理検査法の技術や，研究の成果を持ち寄り特に臨床心理学の問題に関して，従来わが国では見られずにいた精神医学の専門家と心理学の専門家の討議協力の機会をつくり，かつこれら日本の研究者による集積検討された資料を基礎にして，日本人に関する諸検査法の標準化の仕事を促進すること であった」。班を４

つに分け，(1) ロールシヤッハ・テスト，(2) TAT，(3) ウエックスラー・ベルビュー・テスト，(4) その他のテスト（Zondi，MMPI を含む）とした。

各大学からの参加者をみると，

名大精神科：村松常雄，星野命（心理，後基督教大学）

G. Devos（文化人類学，アメリカから来日），丸井文男（医学）

金沢大：佐竹隆三（精神科）

慶大医学部：塩入円祐（精神科），佐野勝男（心理），槇田仁（心理）

順天堂大：懸田克躬（精神科）

国立精研：井村恒郎（精神科），佐治守夫（心理）

片口安史（心理）

名大教育学部：依田新，村上英治（心理）

京大教育学部：正木正

東京教育大：中野佐三，斉藤義夫（心理）

早大：本明寛（心理）

日本女子大：児玉省（心理）

横浜国大：外林大作（心理）

日本の児童相談という本の著者はこの時のことをこう伝えている。「これら五大学の医学者，六大学の心理学者，一研究所の医学，心理学者が，それぞれ理論と実践の両面からこの研究に参加し，少くとも当時わが国に於ける第一線に従事している学者を統合した研究体制を整えたもので，臨床心理学者空前のプロジェクトであった。」といっている。

その最も大きい成果は，このプロジェクトが前掲の研究者の名前が示すように，その後ロール・シヤッハ及び TAT の研究者を多産したことである。あがっていないものでは，金沢大の佐竹氏は Zondi で有名であるが，ロールシヤッハも手懸け，金沢のロールシヤッハ・グループ田中富士男氏ほか多田治夫，市村潤氏等を育てることになり，名大のロールシヤッハ・グループは，日本各地の大学にロールシヤッハ研究者をばらまくことになった。「ロールシヤッハ研究」の編集の片口氏は，多少おくれてスタートしたが，ロールシヤッハ研究のような，素晴らしい研究を載せる年鑑を出すことになり（昭和23年），筆者はこの顧問になった。TAT は，名大グループのほか精神衛生研究所グループの TAT 版をもたらした。ウエックスラー・ベルビュー知能検査は，筆者が後で WAIS を標準化することになったので立消えになった。

心理診断法双書三巻：村松博士の共同研究の最も具体的な産物は，昭和33年中山書店から出版された心理診断法３巻である。監修者が，戸川行男（早大），児玉省（日女大），小保内虎夫（東京教育大），村松常雄（当時名大），懸田克躬（順天堂大）で，編集者が本明寛（早大），外林大作（横浜国大）であった。第一巻ロールシヤッハでは阪大医学部の堀見太郎氏，長坂五郎氏，辻悟氏などが阪大医学部精神科をあげてのうん蓄を傾け，阪大スケールと呼び，名大は村松博士と村上英治氏が名古屋スケールを展開し，金沢では佐竹氏と田中富士夫氏がロールシヤッハ変法について書き小保内氏がロールシヤッハ批判と展望を書いた。

TAT については，早大の戸川教授を中心に，慶大の佐野勝男，名大精神科の丸井氏等が書いた。名大版 TAT（丸井氏）と精神医学研究所の TAT 版（佐野勝男，槇田仁氏）が，日本独自の資料と方法に基いて作製され，名大版は今も使われている。

日本で戦後一番早くロールシヤッハの研究を始めたのは阪大の長阪氏であろうということになっておるが，戦前からのことについては，資料が不正確であるが，戦後では応心第三回大会に東京文理大の教育相談部の山崎正氏が発表している。戦時中頃から手がけていたのは本明氏であるらしい。

筆者は，ロールシヤッハには非常に多くの時間と努力をかけた。本気になって勉強を始めたのは，昭和26年ガリオア計画による第二回の訪米行から帰国後であった。当時進駐軍の心理学者 Hoch 大尉と親しくしていた関係から，米陸軍式を知り，更にクローファ式，ベック式を参照して，その何れでもないが，各々の長所をとり日本の文化風土にあった日本女子大式ロールシヤッハ法をつくり上げようとした。これが心理診断法第一巻の内容である。このため，女子大児童研究所を中心に多数のテスターを養成し，約5000名近い被験者の資料を踏まえてあらゆる基準的な資料を発表した。この資料は今でもまだ参照する価値があると思っている。例えばP反応，反応領域の D，Dd などの出現にしても，日本人が示す出現率はベック，クローファなどとちがっていることは当然である。筆者は粗大な仕事を幾つもしたが，このロールシヤッハの研究だけは細かい所まで注意を払ったつもりである。

双書３巻発行について，中山書店は，余り売れそうにない奉仕版みたいになるといっていたが，実際は20年位の間に何回も刷り直したようであった。

昭和34年（1959）５月２日～４日は，第26回応心大会を日本女子大で開いたが，ロールシヤッハなどの発表会場は大教室が一ぱいになり，熱気があふれ誰れかが発表すると待ちかまえていた様に他の研究室から批評が飛び出すという有様であった。こういう状態が何回かの大会

で続いたようであった。25-6年前のことであるが応心こそその論戦の場であった。当時の論客たちは，今は老熟した大家となっておさまりかえっていられるようである。但し今頃の「ロールシヤッハ研究」でみると研究水準が一層上昇したようである。こういう熱気あふれる研究がどうして起こったか？　ということについては村松博士が医心共同の研究体制をお膳立てせられたことが研究の足並を一緒に揃える上で重要な役割の一端を果したことを認むべきであろう。このほか終戦後新しい臨床的アップローチの方法としてロールシヤッハ，TAT 等に取りくむみたいな時代的雰囲気，ガイストがあったのではないかと思っている。村松博士は，児童研究所のすぐ裏というか，上というか眼の先に住んでおられて，我々が学会の前など夜10時すぎまで電灯をつけて大きい声でしゃべっていたのが聞えていたのではないかと思っている。

因みに Devos 博士の名前があがっているが，彼はシカゴ大学出の文化人類学者で，ロールシヤッハを使って，日本人の性格分析をするために来日していたもので，名大では彼の方法を大分参照したようである。

臨床心理研究会：心理学，とくに臨床心理学と医学との関連は，筆者らの周辺ではあちらこちらで見られるようであったが，筆者は慶応の塩入博士，斉藤神経科病院の斉藤茂太院長，心理学の鈴木清さん，植松正さん，品川不二郎さん，松村康平，霜山徳爾さんらと一緒になって，臨床心理研究会なるものを持って臨床例を持ち寄っては研究会を開いた。そして会員の方のお宅で色々ごちそうになった想い出がある。また筆者はこの臨床的訓練を進める意味で，慶大医学部の生理学，精神医学その他の学科を聴講させてもらった。加藤元一先生の神経伝導の不滅衰説などもきいた。また講座で動物解剖，組織の実習などもしたものである。たまたま慶応の予科で教えていたもので，こういう便宜が与えられたようである。慶応にいた時に，横山松三郎教授という，アメリカ大学じこみの心理学者がいて誠に確実精確な実験法を教えておられたが，この人の肝入りで大学の研究室に城戸幡太郎氏や林髞氏などを招いて懇談会が行われたことがあるが，これらの人とは立場の違いでかなり烈しく張り合ったように思う。林髞さんと知り合いになったのはこういう折である。また慶応の林銑蔵さんと金子秀彬さん等とお近付きになったのもこの折である。このお二人には後で日本女子大の児童科を一金子さんには専任として一お手伝い願うことになった。

刑事政策研究会：応心で知り臨床心理研究会で一緒であった植松正教授との関係は，更にまた法務省関係の分野まで拡大することになった。昭和35年8月22日，法務省の外郭団体刑事政策研究会なるものが設立された。日本医大学長河野勝斎氏などのきもいりで設立されたもので，犯罪者処遇，指導などから更に広く犯罪原因の追求までを含む刑事政策の問題（この説明は植松さんから教わった。）について意見を交換しまた若い研究者を奨励するようなことをした。役員としては元の法務大臣あり，その他最高裁，検察庁，弁護士大学教授その他財界を含む各界の人達，それに法務省の総合法務研究所の人達を含む会長，理事，評議員の構成であった。筆者は心理畑というのであろう，最初から評議員の一人になった。会議に行ってみると植松正教授がいる。彼は法律と心理の両刀使いで最初の評議員，後で理事になった。はじめ若い人達に研究補助を行なっていた時には心理学的な面での多少のお手伝いをしたが，只今は年一回話し合いの場のようになっているが，司法弁護関係の練達の人達の話をきくのは，また違った味があった。出来たのは昭和30年だから自分と植松教授は25年間関係していることになる。昭和46年4月植松教授の還歴記念出版が行われて，当時東大教授後の最高裁判事団藤教授の編集で刑法と科学という本が有斐閣から出版された。筆者は幼少期の非行性の問題という一文（印刷で50頁以上）を書いた。植松氏は心理と法律の両刀使いの上に画をかくし，まことに歯ぎれのいい心理学者である。鈴木清さん，塩入博士，品川さん，間宮さんと筆者らの臨床心理研究会での結びつきは，更にまた田中教育研究所関係にまで連らなった。鈴木さんは所長。それから我々はその評議員として，毎年一回は必らず会っている。学問＋友情の輪はこのようにして，いつまでも広がっていったようである。目下理事長が田中英彦氏，所長が間宮武氏である。

職業興味検査：占領軍時代に文部省の委嘱で牛島義友氏が委員長で，文部省の依嘱で日本のテストのことを調査する委員会が発足した。日本の在来のテストにどんなものがあり，使用に耐えるかどうかを調査する委員会で，ざっくばらんに話し合う機会が与えられた。牛島義友氏，渡辺先生，田中寛一先生，日大の伊藤祐時教授と筆者が委員であったが，調べてみるとおよそ凡ゆるテストが未開拓不充分であったが，ことに職業興味に関するものは皆無であった。渡辺先生は Germane の興味テストに着眼して標準化して委員会の名前で発表された。昭和25年のことである。この後筆者は，Strong の職業興味検査に惹かれて民主教育協会と日本職業指導協会の援助を得て日本版の製作にとりかかった。参考にしたのは，1938年8月発表されたスタンフォード大学のストロングの職業興味検査（男子用）改訂版であった。テストの構

造も項目も面白いし，また青年達の進路を決める上でも重要な意味を持つものと思って取りかかったが，大変な仕事になった。あのテストの基本資料になるものは，日本の各界の一流人の興味類型であって，このためには日本各界の知名人にお願いしてテストを受けてもらわなければならない。このためにどれだけ苦労したことであったか！　僕の本の一番最後にこうしてテストを受けるように世話をしてもらった人や機関の名前があげてあるが，あれを見る度に身にしみた苦労を思い出す。作り上げたスケールは，1. 新聞雑誌放送記者，2. 金融Ⅰ銀行 3. 金融Ⅱ保険証券業者，4. 一般経営者，5. 教育者，6. 公務員，7. 自然科学者，8. 医学者，医師，9. 軽工業技能者の10種類を発表したが，これは並大抵の苦労ではなかった。例えば医師の資料をとるためには元日本医師会長武見太郎さんにお目にかかってお願いしたこともあったが，武見さんはそういう御研究ならといって，いとも簡単にお引受け頂いたことを思い出している。さてテストは10年の歳月がかかって，1961年に出来上って文化科学社から出版された。見かけは堂々としておるし採点表もついているが，採点法がむずかしいので人が使ってくれない。また他の研究者によると使ってみて，どうもよく識別できないみたいと言い出した。英文で Strong-Kodama Vocational Interest Inventory，日本版では逆に児玉ストロング職業興味検査と名をつけた。原版は8部400項目から成り，日本版は7部360項目として，単なるアメリカ版の adaptation ではなくて，かなり日本人向きに変えたものであって，自分では多少得意になっていたものであっただけに落胆した。今なら自動採点法を使うところであろうが，全て手を使った採点法になっている。骨を折った作品が駄目であったという感じである。こういうこともあって職業指導協会との関係が続き，協会が DAT 適性検査を作製した時には，伊藤祐時君や小松君のお手伝いをした。今コンピューター時代に入り，職業が要求する作業もちがってきているだろうから，今頃はまた違った角度から職業興味を考えなければならないかも知れない。

日本保育学会設立さる：昭和23年倉橋忽三，山下俊郎両氏を中心に日本保育学会が設立され，第一回大会がお茶の水女子大学で開催された。会長倉橋，副会長山下，荘司雅子両氏。これは日本女子大及びお茶の水女子大学が新制大学になった年で，時偶々自分は日本女子大学の児童学科の組織作りをし，科長をし，また児童研究所の主事をしていた関係から，自分のそれからの行き方に大きい関係を持つことになった。ロールシャッハ日本女子大式も MMPI も日本女子大での所産であった。しかしこの話をもっと進める前に愛育研究所のことを語らなければならない。

愛育研究所：愛育研究所は昭和8年皇太子殿下の御誕生を記念してつくられた恩賜財団母子愛育会として発足した。斉藤文雄医博を病院長として発足したこの研究機関は，その制度並びに研究者の陣容においてまことに堂々たるものであった。筆者は戦前，東大の岡部弥太郎さんが組織されて愛育会で開催されていた幼児研究グループに所属していたことがあったが，これは戦争と共に消滅した。愛研で心理学的に一番注目すべき仕事では，戦前，昭和14年に出版された乳幼児精神発達検査である。ウィーンのシャーロッテ・ビュラー女史の方法にのっとって出来上ったこの検査は，日本唯一の，しかも非常にいい発達検査であって，我々も随分お世話になったものである。戦後昭和24年に本だけは金子書房から再版された。牛島義友，森脇要，木田一治氏らで作製され，当時としてはこれと匹敵するテストはなかった。終戦後愛育会は，昭和39年日本総合愛育研究所となって衣更えをしたが終戦後30年間に行われた研究業績をみるとその多岐多量なことは，今見ても眼を見張るものがある。第一，研究者の多士斉々，業績の多角多量にわたることである。こころみに研究者を拾ってみると，医学畑で斉藤文雄院長をはじめ，宮崎叶，松島富之助，高橋悦二郎，宇留野勝正，それに小児栄養の武藤静子の諸氏が顔を並べ，心理畑では牛島義友，森脇要，津守真，おくれて山下俊郎，竹田俊雄，高橋種昭，平井信義（この人は医学と心理学の両刀使い），村山貞雄，権平俊子の名前が登場してくるのである。研究業績で心理畑に限ってみても発達はもとよりのこと，母子関係，しつけ，言語，遊び，農村の児童，心理療法，障害児保育等々，凡そ臨床で考えられる凡ゆるテーマが登場している。この陣容と研究計画をみて，応心が実際的な関係を重視したように，ここでも子供と親の関係を広く，且つ総合的に考えていたことがうかがわれる。時勢のことを考えると，この研究機関を構想した人たちは極めて学際的でかつ近代的であったというべきであろう。もう一つ注目すべきは，これらの人達は医学畑，心理畑を問わず後年日本の各界で活躍する人材を育成していたというべきであろう。心理畑では上にあげたような人達は，愛研を経たのち，各大学または研究機関に進出して，日本保育学会の中枢の一部を形づくるに至ったことをみると，愛研が保育学会に流れこんだような錯覚さえ持たされるのである。筆者は，愛研の中にいたわけではないが，これらの人達との知偶を得て，刺激され教えられたものである。森永良子医博は，偶々日本女子大で教える機会を持ったが，斉藤文雄

先生のお嬢さんである。専ら伊豆逓信病院で学習困難児の研究に取り組んでいる。

日本女子大学児童研究所

日本女子大学児童研究所は昭和３年安田財団の寄付で設立された。アメリカのミネソタ大学，アイオア大学，エール大学等の著名研究所と比べて殆んど同時位のまたは多少早い設立であった。筆者は昭和12年頃慶応予科がまだ専任のまま日本女子大学校で兼任講師となった。松本亦太郎先生が心理学を教えておられたのが，御病気で退かれることになって，その後釜ということであった。それから昭和23年に専任になるまで兼任で続けた。はじめの頃は波多野寛治さん，松本金寿さん，それに後で波多野夫人になられた畠山さんなどがおられた。筆者の仕事は大橋広学長の下で漸次新制大学としての児童学科の設立と組織にうつり，昭和23年日本女子大学は，東京ではお茶の水女子大学と共に新制大学になり児童学科が誕生した。そしてその後文学部に教育学科を設立するお手伝いをし，また児童学科大学院設置にも関係した。こういう関係から，筆者の仕事は児童心理学，臨床心理学，保育心理学に集中することになった。学科の教授としては，アメリカのコーネル大学から帰国したばかりの南博さん，慶応から金子秀彬さん，林銈蔵さん（兼任）をお願いし，児童文学で与田準一さん，児童文化で関野さん，小児科で長竹さん，児童精神医学に牧田清志さん(二人とも兼任)。また心理学に東洋さん，おくれて天羽大平さんらを迎えた。教育学科（昭和25年設立）では村山貞雄さん，兼任で石山修平さん，梅根悟さん等をお願いした。大学院は昭和37年に出来たが，元労研所長の桐原葆見文博，詫摩医博（現詫摩武俊さんのご尊父），坂本一郎，山村静（児童文学）さん，後になって依田新さん等の当代一流人をお迎えすることが出来た。さて，研究の方はどうなったか？　各先生方のテーマは別にして，自分の方は学科新設早々で多忙を極めたが，いつも自分の頭にあった子供のしつけと性格を中心に，かつ日常生活に密着している問題，例えば団地生活と子供など，それに臨床的問題また臨床的な問題の一端としてロールシャッハなどを取り上げた。卒論でよく出来たものは手を入れて保育学会，応心などに発表させた。昭和25年頃から応心，保育学会などに発表させたものが50位はあるであろう。この時代に今教授である加藤翠さん，大日向達子さん，宮本美沙子さんらが児童研究所で育ちつつあった。

WISC，WAIS の日本版標準化

筆者は1951年（昭和26年）ガリオアの人事交流計画で，岡部弥太郎（東大），淡路円治郎（東大），宮城音弥（東京工大），肥田野直（東大）の諸氏と一緒に臨床心理学の実際的見学という形で，１月終りから３カ月余り，アメリカの諸大学や有名精神病院を見学する旅行に参加する機会を持った。形式上は僕がリーダーであったが，僕の言うことなんか聞く人はいなかったが，楽しい有益な旅行であった。紐育で紐育大学附属のベルビュー病院を訪れて Wechsler 博士（心理主任）に会ったところ，WISC という知能テストの日本標準化をしないかという話があった。僕は性格の問題が一番の関心事であるからといって断った。ところがこの旅行の後の方でミネソタ大学に行ったら，品川不二郎さんが留学中で，この話をしたら，日本版の標準化をしたらどうかと誘われたので，気が変って帰国後，田中教育研究所で品川さんと共同で昭和28年日本版 WISC，同５年後の33年に WAIS 成人知能検査の標準化を発表した。WAIS の時には，慶大の印東太郎さんに参加してもらった。WISC は50版まで行った。1978年 WISC-R の改訂版の標準化を行った。WISC-R の方が標準が高過ぎるという御批判をあちこちでうかがっているが，実は WISC の方が基準が低すぎているのであって，WISC-R の方は大体いいと思っている。ビネーその他のテスト同様，WISC では I.Q. 130以上の子供が出すぎているというのは，少し考えなければならないところである。WAIS も古くなったので，目下改訂版が進行中である。但し，Wechsler 博士は1981年に亡くなられた。

日本の児童のしつけの研究

児童心理をやる人の多くがそうであるように，筆者にとっても，子供の，やがて大人の性格はどうして作られるか？　ということは不断の関心事であった。学生にも考えさせていたが，やがて自分でも専心これに取り組みたいと考えるようになった。終戦後日本の家庭のしつけはどうなっているか？　そして子供の性格はどうなっているだろうか？　ということを本格的？　に取り上げてみたいと考えた。やさしいことではないことが分っていたが，約100項目のしつけと子供の性格形成に関するアンケートを用意して東京を始め全国的に調査してみたいと考えた。日本女子大でもらった研究費と女子大の中に出来た農家生活研究所の一員として，その研究に同行した助手の現在小佐野さん，田近さんなどと一緒に東京都内で江戸っ子的な場所４，５カ所をはじめ，関東では埼玉県を皮切りに，やがて全国的に，北は青森から秋田，新潟，阪神，岡山，高松。九州は佐賀，宮崎，鹿児島と全国に互って40数カ所の小中学校の児童生徒を教室で，アンケートに書いてもらう方法で調査を行い，親に対するアンケートは子供が家に持ち帰って記入してもらう方

法によって約6000人の児童とその親6000人の調査票を集めることが出来た。この仕事は一番最初にスタートした時からいうと約10年の歳月がかかった。だから最初調査したところは，またやり直すという作業もしなければならなかった。農家生活研究所の調査方針が，農家経済的に特長のある地域を選んだこともあって，農研の調査関連地域では，特徴的な地域の獲得ができた。この結果が昭和44年発行の日本保育学講座10巻中の第六巻「子供のしつけと性格」となった。初版出版後１年で11版になったところを見ると，世間はこういうものを求めていたのかも知れない。筆者の時間と努力をうんと食ったものであったに拘わらず大量的に資料を集めようと思って調査票による一気調査という粗大テクニックを使ったことは，いまも心に残っている。今までの研究が年と共に古くなっていくのは已むを得ない運命であるが，今この本をひもといてみると苦労の程が思い出されて感無量である。日本教育心理学会第10回大会日女大(1968年10月)で人格形成の経験的基礎という題の下で「日本におけるしつけと児童の性格形成」という宿題報告をしたが，これは本研究を骨子としたものであった。前記保育学講座が出来た時に，保育学会では研究委員会を作って，全国幼児の発達の共同研究を行った。講座第11巻「日本の幼児の精神発達」はその結果である。本研究では筆者は社会性を担当して，山下，村山，松村諸氏の別々の研究と一緒になっているが，この時筆者の研究がユネスコの眼にとまったといって，ユネスコに関係のあった英国人の心理学者から自分に知らせてくれた。それは他でもない。表やグラフに英文がついていたのと，要約が英文でついていたからで，ユネスコでは英文の説明入りの表を見たらしい。

航空機騒音の影響の研究

日本女子大を停年になる前に都内昭島市医師会から，同市内の拝島第二小学校の子供達が，すぐそばの米軍飛行場並びにそこから離着陸する飛行機の騒音に悩まされて困っているので調査してくれないか？　他で調査してもらったがどうもはっきりしない，という話があった。研究費が少ないということで，学生の卒論にしてもいいという話で，５カ年計画で研究をスタートした。学生たちは誠によく動いてくれた。熱心なこと専門の調査員以上くらいであった。筆者も学生達と一緒に何度も何度も一週に一度以上一現地に出張して，地区毎に騒音を計り，住民の人達と面接し，また知能検査，不安検査，聴力検査などを施行して毎年一回ずつ報告書を提出した。その結果は朝日新聞と朝日ジャーナル，「公害とその対策」誌が大きく取り上げて一躍騒音屋みたいになって関西空港の騒音研究よりも，むしろ，大げさに言われるようになって，恐縮したものである。勿論整った施設，設備を伴ってやったものに比べて原始的にちがいないが，当時としてはこういう資料さえもなかったものである。その直後，東京都の公害研究所から研究費のお裾分に預り，直ぐ引き続いて，文部省の統計数理研究所の林知己夫理博，並びに日立の近藤暹工博との共同で，環境庁の研究助成で２カ年間の研究を行った。その結果，林さん命名の PAANI (Psychological Assessment of Aircraft Noise Index) 航空機騒音心理的評価法を発表した。この研究はアメリカ音響学会の雑誌にも載り，国際的にも何回か発表を行った。アメリカの NASA もこの研究をその資料中に何回も取り上げた。今までの測定法の欠陥を補うつもりで出したものであったが，近来は余り引き合いがない。飛行場周辺の人達が騒音公害訴訟を起こした時には裁判所に何回も証人として出廷した。

小児の問題行動の研究：日本女子大を停年退職して東京成徳短大に移ってから，一つの研究に取りかかった。それは小児の問題行動の研究である。「子どものしつけと性格」の研究に使った項目中から，子供の問題行動に関する項目を引き抜き，更に医学的な問題を補足して調査票を作製し，前東大，現静岡県立こども病院々長中村孝，伊豆逓信病院小児リハビリ部長上村菊朗，東京女子医大小児科教授草川三治，現国立療養所足利病院々長中村博志，森永良子伊豆逓信病院リハビリ副部長，阿部明子東京家政大学助教授，中田カヨ子東京成徳短大助教授，立川和子伊豆逓信病院心理主任，松田素子同教育主任，それに小林芳郎（現大阪教育大教授）と筆者の11名で加州大学 McFarlane 他の児童の問題行動の発達的研究を参照しながら研究を進めた。医学心理学の共同研究で病院その他で出くわす患者その他をテストしながら，約10年余の歳月を費して，昭和57年８月，医歯薬出版の小児メディカル・ケア一叢書の１つとして小林氏を除く10人の共著として出版された。加州大学グループの研究を参照したが，それとは全くちがったものとなっている。日本でもまだ研究的に取り上げられていない側面を持っていると思っている。

心理技術者資格認定委員会のこと

この問題には，筆者がかなり深く関係しているので，ごく簡単に取り扱って通ろうかと思って書いたが，考えてみるとこれは，今まで近かった心理と医学界の関係に何かヒビの入るような契機となった観がある重大な事件であった。それで原稿を書き直すことにした。

心理技術者の問題というのは，病院等に勤務する心理の人達が，医者と同等のレベルで仕事をしていないで，

一段低いレベルで一例えば短大出の技術者級に扱われている一という理由からアメリカのように医者と同等のレベルで一病院であるから最終責任は医師が持つものとしても一仕事をしたいという要望からスタートしたものであった。アメリカでもこの問題があり，長い接渉の末，医心対等の立場で仕事をするようになった歴史がある。こういう話が日本で一番最初に出たのは昭和30年ごろ応心の運営委員会であったと思っている。しかし機熟せず何年か経過したが，やがて東大の三木安正氏と筆者と，それからも一人と内部接渉などの結果，昭和27年の第26回日本心理学会大会で，日心，応心，教心の三者合同委員会の提案として採択され翌38年５月上記三学会から他の関係団体に向けて認定機関設立協議会を発足させるための代表者の推せんを求め，５月25日と６月１日東京大学で会合の上，設立準備会が発足した。事務所を日本女子大児童研究所に置き，天羽太平氏を事務局長に任命した。このような事態の中で19の心理学関係学会がこの設立準備会に参加し，筆者が委員長として，資格の性格，資格獲得のための条件，ことに修得すべき学課目，実習経験，修士課程終了などの条件などが論議され，その中間報告が提出され昭和40年３月までに参加団体のそれに対する意志表示を求め，41年７月31日準備委員会最終報告書がまとまったが，この辺りから精神医学界から横槍が入り，修得課目の中の不備欠陥を指摘する声があがった。筆者は準備委員長として精神医学の台理事長に，顧問または相談相手になってもらう人の推せん方を求めたところ，当時日大の井村恒郎氏を推せんされ，更に井村氏を通じて，日本精神医学会から井村氏(日大)，高臣武史氏（国立精研)，黒丸正四郎氏（神戸大，精神病理，精神療法)，上出弘之氏（東大)，小此木啓吾氏（慶大，精神分析)，石川中氏（東大，精神身体医学)，樋口幸吉氏（法務省，矯正医学会)，柏木昭氏（国立精研）の諸氏の推せんを得た。書いてしまえば何でもないが，この間筆者その他の心理学関係者は各方面の医学界の方々を訪問しては接渉をくり返し，まことに苦渋にみちたものであった。

42年９月に最終準備会を開き，加盟各学界など団体から正式機関の第一期理事候補の推せん方を求め，同時に精神医学界の前記顧問の方々も専門委員となって頂くことになった。30年応心で最初の意見の表示があってから約10年以上，37年に日心大会で正式に運動が決定されてから，５年間を経た。42年11月15日，新宿の安田の会議室で心理技術者資格認定委員会設立総会が開かれた。三宅守一氏が司会者，天羽太平氏が経過報告，筆者が準備会の解散宣言，玉井収介氏が機構の発効を宣言して新理事の紹介を行い，戸川臨床心理学会長のあいさつ，その他のあいさつがあり閉会。直後第一回理事会で筆者が理事長に選ばれた。

これで第一幕は終って，翌43年には待望の「臨床心理士」が生れるものと予想されたのに，一向にその事態が進まず，学会の内・外に不満批判の声が聞かれ，また専門委員会から，理事会から依頼した望ましい条件の提出があったが，精神医学会は44年５月の金沢の総会で当時流行のようになっていた大学紛争と学会騒動で大荒れで，井村氏は専門委員長を辞任するという仕末であった。筆者も一いつであったか定かでない一理事長を辞任した。44年の名古屋での臨床心理学会大会では，また荒れたようであるが，筆者は出席していない。

これは必要以上に長々と書いて了ったが，その後，特に今頃になって臨床心理士の制度があったらという声をきくが，この認定運動の形ではどうにもならない。筆者は，臨床に従事する心理学徒は充分な知識と技術の上に病院では医師は医学の立場から，心理学は心理の立場から各々長所を生かし不足を補い合って，協力できることが一番いいという考えは依然に変らず強い。しかしこの運動が示したようにまたアメリカの例が示すように，両者が辛抱強く協力の道を探るべきものと思っている。心理学徒は医学者に取って代ることがなくて，互いに努力することであって，両者が別々にやる仕事は充分に多いと思っている。

最近に九大の成瀬悟策教授を中心として心理臨床学会が組織せられ，充分な心理学的知識の上に極めて重要な実習と訓練を要求する心理臨床家の出現を考えているというまことに喜ばしい限りである。筆者は上記のような，苦しい経験をかなり精しく書いたが，これは臨床心理学徒のために何等かの参考になればと思う次第であった。

さて話を資格認定委員会がつぶれた事がもたらした重大な結果を考えなければならない。端的にいうと応心当初の学際的歩みとして，医心が接近し，協力していたのがこの事件以後再び多少疎遠勝ちになったのではないかという気がする。学際的協力の実際に接したことのなかった人達は，医心はもともと別物であるみたいな考え方をお持ちの人が多いではないかと思っている。一方実際的問題として，psychosomatic をはじめ，biopsychosocial に至るまで，学際的考え方の必要は現代社会の日常的考え方になりつつあるのである。筆者が実践したというのではないが，この時代的要請に応えることは絶対必要である。中にはこの学際的実践をしておられる人もあるが，どうも未だしという観である。

国際テスト委員会：上記の資格認定委員会と前後して直接関わりがあったわけではないが，ヨーロッパでテストの使用資格を引き上げる運動が起こった。スイスのジャン・カルディネ博士が音頭取りで，世界各国に呼びかけ，応心にも招請があり，筆者もベルギーの国際応用心理学会の際，またカナダのモントリオールの応用心理学会の会議でも，この問題を取り上げて南博さんと一緒に会議に出席したように思っている。趣旨は，テストを正確に使わなくては危険である，ということであったが，アメリカは臨床心理的な仕事をする人の資格を充分に規定しているから関心は余りなかったが，欧州その他ではこの必要があるという理由であった。こういう事に関係があったかどうか分らないが，筆者は83歳の時にスイスのフライブルグ（Freiburg）大学（フランス語部）から教授の募集があるから応募しないかと言って来た。それでフランス語が十分でないこともあるし，年齢のこともあってどうしようかと思ったが好奇心から一応出してみようと思って履歴書と業績などを送った。但し予期したように落選した。フライブルグ大学ではドイツ語的な部門とフランス語的な部門があって，筆者はフランス語の部門からの誘いであった。落ちても仕様のないことであった。大学からの結果の通知にはフランス語のことが書いてあった。

情動発達研究所：小田原女子短大におった頃，東京渋谷の情動発達研究所という所と関係することになった。渋谷にある，或会社が文化的社会事業として開始したもので東京医科大学の小児科の本多教授を所長，精神衛生研究所の加藤正明博士を顧問，東京医大の星加明徳精神科の坂上紀幸の両人が非常勤，筆者が附属保育施設Maison du coeur 園長というわけである。マンションの何階かの一階全部を提供してもらい，それを大小の室に改造した施設であった。幼児たちの体育にも重点を置いたので，拓大杉本功介教授，幼児体育研究所の亀谷さん，小田原女子短大助教授荒木美那子さんそれからメゾン・ド・クールの体育講師能方恭子さん等が集って幼児体育の研究をしたことなどもあるが，このメゾン・ドークールがどういう保育を目標としたか？　保育効果は？ということにしぼって当時，園の情報誌に乗せた一文（1978年3月）を引用するだけに止めたい。なお保育を手伝って頂いたのは関根静江主事，飯島澄子，亀田紀子田丸京子，神原クニ子のみなさんであった。（末尾参照）

海外で勉強と発表

ISSHD：昭和46年（1971）7月国際応用心理学会がベルギーのリエージュで開かれて，筆者は昭島の航空機騒音の研究を英文パンフレットにし，この大会のコロキイアムで発表した。日本の研究として多少興味を持れたたようであった。この時ピアジェに関するワークショップがあり，フランス語で困った時に電気通信大学の竜沢武久さんに助けてもらったことを憶い出す。

この時の旅行では約40日間ヨーロッパに滞在したが，目的の一つはオランダの Nijmegen（ナイメーゲン）大学で始めて開催された ISSHD（国際人間発達学会）に出席する為であった。ナイメーゲンはオランダの北部地方にあり，人口数万の小都市の私立カトリックの大学であったが心理学研究室とその他の研究施設の大きいことに驚いた。心理学は10階建てと5階建てのビルを持ち，10階の方は違った種類の心理学が，一階ずつを専用していて，教授，助教授，講師等80名を越えるという教授陣があった。大きいことでは驚かないアメリカの学者が，驚いていたようである。会長はボン大学のハンス・トーメイ教授であった。同じくボンの Lehr 教授（女性）とはベルギーの国際応心大会で会った。この会は乳幼児から老齢までの発達心理の学会で大きくはないが専門家だけの小じんまりした集中的学会であった。日本からの出席は筆者一人であった。あと2年後（1987）には日本で大会が開催せられる予定である。

1971年（昭和46年）も海外行きで忙しい年であった。7月にロンドンで開催された音響学会に近藤暹氏と一諸に出席し，近藤さんは PAANI について発表し，筆者はワークショップで提言し，終ってから大西洋を渡ってカナダのモントリオールに行き月末から8月にかけて開かれた国際応用心理学会で PAANI の発表をした。またモントリオールで打ち合わせてあった藤田復生さん（ゆかり文化幼稚園長並びに昭和大学教授）と落ちあってワシントンに行き，国務省にお願いして，米国内の保育施設並びに研究所の見学の便宜をお願いした。その依頼で教育局（当時はまだ局単位であった）の女性担当官は電話一本で全国的に手配してもらって見学して回った。あの手際良さと，至り尽せりのあっせんの仕方はアメリカだなあ！　と感心し，感謝もしたものである。最後はロスアンザルスに行き，ここで藤田さんは中米に行き筆者は日本に帰った。

Lund でシンポジウム：1979年（昭和54）は筆者にとって，海外行きで忙しい年であった。6月にスウェーデンの Lund（南部の古都）で ISSHD 大会が開かれた。英国の詩人心理学者 T. Moore 教授（当時デンマーク内の大学の教授）に招請されて，青年期から成人期の問題のシンポジウムに参加した。“From High School Days to Enployment through College”というような題で講演したが，外国人シンポジストの発表が

低調だったので失望した。但し古都ルンドは中世都市で魅力があった。人口僅か７万位，古木が豊かに茂り，郵便局や役所が昔の城であった建物にあり，町には中世からの住居や教会があり，誠に古色そう然としたたたずまいがあった。大学の創立も古く，医学部は特に有名なようであった。日本からの出席者は，広島の祐宗省三さんと筆者の２人だけで，一緒に散歩し，素晴らしい竹のステッキを買った。コペンハーゲンから船で一時間位で対岸に渡り，それから汽車で40分位で着くが，あんな現代ばなれのした気持のよい町は多くはないであろう。学会開会２日ばかり前に到着したので，大学の寮に入れてもらえず，駅前のホテルに泊った。その受付の女性のきれいであったこと！　英語は上手だったし，何とも言えぬ古都にふさわしい美しさを身につけていた。画家があいう人を取り上げてくれないかと思った。写真を写したがフラッシュの持合せがなくて，よく撮らなかった。大学の寮も大揚であった。大きい室を僕一人にくれたり，宿泊を延ばしても費用を大揚にきめたり！　こういうことは余りないな！　と思って，つい余計なことを書いてしまった。

コペン子供冒険広場見学：Lund の会議が終ってから一度日本に帰国したが，研修旅行で，この年はもう一度ヨーロッパに行った。コペンハーゲン，ボンなどを訪れる為であった。金沢の沢田忠治さん，信州大学の中川大倫さん，熊本の大崎サチさん，長崎の緒方剣さん等と一緒のツアーで，７月18日東京発，先ずコペンハーゲンに行った。コペンハーゲンでは有名なスポーツ施設，遊び場施設を世界的童話作家シスコードさんの御案内で見学した。自由広場，冒険広場はたくましい子供を一しかも親や社会の眼の届くところで一育てようとするユニークな発想と経験に基づくもので，参観した人達は，もっとゆっくり滞在してみたいということであった。デンマークは，また優秀な玩具の産地でこれらの作品も見て廻った。

ボン研究室訪問：デンマークのあと，ドイツのボン大学の Thomae 教授の率いる心理学研究室を訪問した。朝９時から12時半まで，トーメイ教授のほか Lehr 教授など４名の教授が，各々自分の研究室で，しばしば実験装置を使い，黒板を使いながらボンの研究業績を説明してもらった。有名な縦断研究のほかトーメイ教授のボン学習法，老人問題の話も聞いた。終ってからレアー教授の研究室の狭いところに約30名近くの者が入って，教授お手製の生肉サンドウィッチとワインをご馳走になった。

ペスタロツチ子供村：チューリッヒからバスで Trogen のペスタロッチ子供村を訪問した。沿道には静かな農村と牧場があり，美しい景色が展開した。２時間で到達した子供の村はアルプスのふところ深く山に囲まれた小高い丘の上にあり，20ばかりの赤屋根の建物が緑の木と草むらの中にかたまってあった。第二次大戦後無数の戦争孤児が行く所もなく街頭にさまよったのを救うため Walter R. Carti が1964年建設の礎石を置いたのが始まりであった。スイスの教育思想家にちなんでペスタロッチ孤児の村という。1976年30周年を迎えた村には国ごとの子供の家が16あり，児童の住民数は312名で30年間に受け入れた孤児は1081名に達したという。その他ロンドンではロンドン大学の C. Hindley 教授のお世話で新しい様式の施設見学をした。

国際幼児教育会議

日本幼稚園連合会は，1978年（昭和53年）７月24，25の両日，東京の帝国ホテルで，その後また京都で国際幼児教育会議を開催した（友松諦道組織委員長）。海外から28カ国代表と日本から2600名の参加者があり，盛会であった。

筆者は保育学会ほからの山下俊郎，岡田正章，松村康平竜沢武久氏らと委員として参加し，第二部会「子どもの発達における遊びと仕事」を司会した。ボンで OMEP に参加したことがあるが，OMEP よりも活発な会議のようであった。またこの種の会議は，学問だけで集まる会議よりも，なごやかなようであった。日本保育学会はこの会議の翌年，1979年が**国際児童年**に当るので，これを記念して「日本の幼児保育」（英文名Early Childhood Education and Care in Japan）を日英対照版で出版した。40章と附録から成り，一人一章で，40名の人が執筆し，筆者も一章を書き，英文の手伝いをした。評判がよく，2000部が売りきれて，再版したようである。

児玉教育研究所

情動発達研究所附属メゾン・ド・クールは昭和49年４月開設以来，６年で55年３月設立者の都合で閉鎖された。小田原短大も56年３月で学長ほか研究所長一切を辞した。そして55年７月児玉教育研究所を設立した。おごそかな名前であるが，実は筆者を中心として，教え子その他で集った小さい集団である。本部は筆者の応接間兼勉強室みたいな所。教え子だけが集って研究所を作るということで始まったにすぎない。室の改造費と諸テスト買付け費用が出た位のものである。児玉教育研究所という名前は，おこがましいから雑司が谷研究所にしないかといっても，ハンコを作ってしまったようなわけである。総勢10数名。数だけは揃っている。

高齢化と精神的長寿の研究：これは一番最初にまとま

った研究で，内外を通じて何回も発表し，昨年はパンフレットの印刷もした。東京都内及び近郊の地域数点の老齢者 cohort を取り上げて，64歳頃から75歳または以上の高齢者を WAIS でテストし，且つその人達と面接して，生活状態，生活意識，社会生活などを調査する方法をとった。東京都の下町で２カ所。一つは新開地的下町と，もう一つが昔からある江戸っ子的雰囲気の下町。それに山の手線沿線の住宅地，近郊の老人ホームなどで１地域55-60名を目標に知能テストをし，且つ，面接調査を行った。この結果，色々なことが分った。(1) 下町１の老人達の知能は65歳-75歳で落ちていない。下町２では落ちるが，山の手老人よりも落ち方が少ない。そしてインテリの山の手老人の高かった I.Q. が75歳では下町１の老人の I.Q. と同じ位になる。(2) 下町２の老人の I.Q. は65-75歳で落ちるが，山の手の老人の落ち方よりも，落ち方が少なくて，統計的に有意の差 (0.01) がある。(3) 山の手と下町人口の生活状態，特に日常生活と社会生活を比較すると，下町人口の方が生活が規則的で，且つ隣保意識が強く，町全体に親密感，一体感，密接な社会生活があることが分った。この研究をエジンバラの国際応用心理学会で発表したら72名の人が質問に来た。また知能の種類によると，例えば「理解」では65歳70歳位で以前より上昇する者があることも見出された。この研究は筆者と柳田フサ，飯島澄子，鈴木光子，高橋豊の諸氏。

この研究は結果の重大性に鑑みて，発表を多少慎重にしていたが，調査の科学の大家林知己夫博士から，おほめを頂いた。それからは気が強くなってあちこちにばらまいている。

WISC-R による性格像の分析：Kaufman, L. M. Intelligent Testing with the WISC-R (1979) は WISC-R を使って性格特性の分析を試みた多くの研究，また独自の見解を提供している極めて興味ある著書であるが，筆者はこの様な研究を我が国に於ても試みてみたいと考えた。その研究開始後４年を経て発表回数も20題を越えたが，依然研究を追求中である。分析角度のヒントを同著から得ているが，研究は Kaufman に限らず我々自身の発想に基いている。WISC の原版の著者 Wechsler も指摘しているように，知的能力の中に性格的要素が混在する限り，WISC-R のテスト結果の中には必らず性格像を反映していると想定して続けているが，知的能力の角度を踏まえながら性格像を推定することは極めて興味ある研究である。また，うちの研究者たちは，このテスト結果の分析から教育相談に応じている。もう既に330名以上をテストしているようである。研究者：大村孝子，石田喜代子，渋谷伊津子，清水とも子，横田愛子，斎藤璋子と筆者である。

日本の幼児の成長発達と保育効果に関する社会性と感情の発達の研究：これは児玉教育研究所の仕事ではない。日本女子大の村山貞雄教授をキャップとして上記のような名目で，文部省の科学研究費をもらって，昭和58年秋から始めた研究である。10ばかりの班があり，筆者は社会性と感情の発達班に関係し，筆者の他北海道大学の三宅和夫，関道子，岡山大学の秋山和夫，鹿児島大学の島田俊秀，松田君彦，大坪治彦の諸氏が研究者として参加している。社会性10項目，下位項目111。感情13項目，下位項目83のスケールを作製して調査票とし，札幌周辺，仙台周辺，東京及びその周辺，中部地方，京阪地方，四国地方，九州全域からの７地方に，人口比に応じて，３-６歳児のため4500×２＝9000枚を配布した。２倍してあるのは同一園児について，園では保育者，家庭で親に評定してもらうことにしてあったからである。有効回収2998枚で約63%であった。その結果は多くの新しい知見をもたらした。

1) 社会性と感情の３-６歳の発達について一応国内の発達基準を得た。2) 全国７地域別発達差もある程度確かめられた。3) 大都市対小都市，町，村など生活環境別発達差が見出された。4) 園児の社会性＋感情の反応を因子分析にかけたところ，８つばかりの性格像が浮かび上った。そしてそこに浮かび上る性格像が現在の小，中学生の性格像と非常に似ているらしいことが分った。端的に言うとかなり望ましくない性格像の者が多く，望ましい性格像の方が出現率が低いことも見出された。5) 対象幼児たちの園における評定と家庭における評定には仮説したように，はっきり差があることが分った。幼児の社会性・感情などといっても，少くとも園か家庭ぐらい環境差を考えなければならないことが明らかとなった。只今，大体の整理を終った段階であって，これは他の諸研究と一緒に出版されることになっている。また筆者等は，上記のような現代の幼稚園児の性格像が浮かび上る以上は，その原因がどこにあるのかを検討しなければならない問題であると思うし，また幼稚園，保育園における保育課程自体にも反省を加うべき必要があると考えるもので，目下，問題を保育学会の教育改革を考える委員会に出して検討中である。いずれにしても，現在の保育について反省すべき点があれば，学会としての意志の表示をすべきものと思っている。尚，園児の性格像については，目下，実際にある幼稚園を用いて児玉教育研究所の高橋豊と樫葉和英などと一緒に検討中である。教育改革などと大袈裟な言葉を使わなくても，この問題が

論議せられている場合，関係学会は発言すべきものと思っている。意見の一致を見ればいいが，一致をみなくても論議して意見を表明すべきである。APA（アメリカ心理学会）には政策委員会というものがあったように思うが。

最後なれど最少ならず：上に述べた中にはあがってこなかった研究や発表も，また筆者の知友の輪になっていた人たちがある。研究や発表の方はまだいいとしても，お近づき願っていた人達は，文中に登場の舞台を作らなかったから脱落したのであるがこういう人達に，一行でも二行でもというのが本節の目的，知友の輪を完成するために。

(1) 故**三隅一成君**，これは前に入るべきであったが，うっかり見落した。彼は筆者がシカゴ大学に行った時より多少おくれてシカゴに来て，Mead 先生の講義をきいてから，すっかり Mead 宗になった男で数年前亡くなるまで Mead, Mead といいつづけた。比較的近年アメリカでは Mead 研究が盛んになってきて，その研究グループが活動しているが，このグループと連絡を取っては，亡くなる前まで何年間かこのグループの人達の中から年に２名ばかり来日してもらって東京の国際文化会館と日大芸術学部でセミナーや講演会を催した。一撥な人で，どこへ行っても Mead の話に持っていって behavioral science（行動科学）の言葉を語りつづけた。この熱心さに打たれて，彼のためにセミナーの費用を出す人もあったようである。セミナーの会長は元立教大学々長，元衆議院議員の松下正寿氏で，筆者は Mead 先生の相弟子の関係で，むずかしい講演の通訳の手伝いをした。彼は国士館大学と日大芸術学部で教えていたようである。この熱心な Mead 運動にアメリカ研究団体は G.H. Mead 賞を贈った。また筆者は，アメリカの研究団体の機関紙に彼の追悼文を書いた。現在阪大教授の三隅二不二氏は彼の長男である。日本では目下広島大学教育学部の森氏ら Mead 研究に打ちこんでおられることは別述した通りである。筆者は behavior の意味，また自我の意味などについて，Mead 先生のような見方をしてもいいんではないかと思っている。Mead 先生は，哲学者であり，社会心理学者でもあったが先生の理論は，哲学心理学，社会学，生命科学，数学の人達にまで取り上げられておる。

(2) 筆者は心理学の物の考え方で，humanistic psychology に惹かれたが，この関係から humanistic psychology のグループの人達，宮本昇さんと石津さんらとの会合にも関係したことがある。

(3) 筆者には学問的なことで親分子分的な関係には興味が無い。但しかつて教えたことのある人達には自ずと親しみを持つし，助けられたり，助けたりした。この意味で日本女子大で教えたことのある人達は，筆者の知友の輪の重要な人達である。そこでそういう人達の一部をここで取り上げたい。品川孝子さん（品川不二郎教授夫人）と阿部明子さんは，児童や家庭の問題の相談相手として筆者よりもよく知られている。

児童学科大学院出の阿部明子，加古明子，中田かよ子さんは**児童の感情の研究**で筆者と共同研究者である。この研究は家庭の中，保育の場，街頭，公園，遊び場，乗物の中などの自然状件下で，子供たちが示している感情の表現や状態を蒐集した子供達の自熱条件下に於ける感情，感情表現がいかなるものであるかを確かめようとしたもので，現在蒐集例約5000例で約10年の時間を経過した。前述の文部省の科研費による研究と並行させようとするものである。

同志社大学の浜治世さん（文博）は中退したが，それまで日本女子大に在籍した。浜松医大の佐藤愛子さん（医博）は，日女大を出てから，京都大学へ行った。

卒業して心理学者と結婚して，自分でも仕事をしている人も沢山ある。岡野恒也教授（動物心理学）夫人，大阪松陰女子大学の西本修教授夫人，松井恵子夫人（福岡で精神病理事長）ご主人は精神医学者で同病院の院長。松井さんは筆者とは MMPI で MMPI の研究で苦労した。そのほか児童教育関係の仕事をしている人に小林恵子，松山似子，山本和代さんなど次々に出てくるがこの辺りで。

こういう人達と一寸毛色の変わった仕事をしていた人に橋本敬子さんがある。この人は自分の家を開放して子供たちを集めて，週何回かの保育をしていた。非常に個性的で思い切り自分の思う通りにやっていて都内のあちこちから子供が集まっていた事が記憶に残っている。この人のご尊父は元早大教授，のち小田原女子短大で同僚であった。

小田原女子短大は仕事としては，整理期と準備期になったが，この時協力してもらったのが小館静枝さんと西方榮さんであった。現在淑徳大学の塩川寿平さん女は国僚であった。話が混がらがるが，現在日本子大の森上史朗教授は東京成徳経大で同僚であった。

(5) 筆者は占領軍駐留時期に文部省主催の IFEL (Institute for Educational Leadership, 教育指導者講習) に関係して一部門の世話役をつとめたことがあって，この事は色々興味があるが既に「日本の保育」誌（昭和60年２月３日号）に書いたので割愛する。

むすび

1. お気づきになったように，本稿は日本応用心理学会，次いで日本保育学会を焦点として，筆者が持った多数の友人知己の方々とのおつき合いを通じて，その中で筆者がしてきた仕事と生活の記録である。学会の歴史的意味が多少はあろうかと思って書いた。但し記録といってもある程度断片的でかなり主観的である。筆者の生活と仕事は，一つのことに集中した梅津八三さん（障害児問題）のような直線集中型でなくて，右を向いたり左を顧みたり，前進したり後退したようなコースを取った，つずら折り行と名づけたわけである。筆者は大学院時代に考えたような生理心理的神経生理学的，更にプラス社会的な構想をひた向きにたどることはできなかった。

2. しかしその方向の正しいことは今も感じているしその必要は，現代の科学が要求していると思っている。日本応用心理学会の先輩たちが設定した学際的方向づけは正しかったし，また学会が取った実践も正しかったし先見的であった。学際的は今や理念ではなくて必要にさえなっている。それなのにその実践が充分に伴っていないみたいである。筆者のいいたいことは，こういう学際的仕事をする人がまだ研究が実現することが必要であると思うものである。この実践なくしては，学問は跛行するであろう。実体は両輪のととのったところにあるのではないであろうか。

3. 応心が自ら，またはしげきとなって，医心協同の研究や作業が行われたことは，貴い記録である。今後もそうありたいと望むものである。但し，心理技術者資格認定の問題の後味は多少悪くなっているみたいであるのが遺憾である。社会のため，学問のため，医心はもとよりその他の諸科学が連けいすることが望ましい。かつて9学会連合の講演会みたいなものがあったが，いまどうなっているであろうか。これもいい事にちがいないが，講演会だけに留まってはいけない。学術会議はこういうことを推進してはどうであろう。

4. 僕の仕事の大切なものが粗大的になっていることは，認めなければならない。しかし日本の事情では已むを得なかったものもあった。日本に前例的な仕事がなかったから一気にその穴埋めをしたかったということがその理由の一つであるが，筆者の穴埋めを赤してもらいたいものと思っている。

5. 筆者がシカゴで最も敬服した G. H. Mead 先生のことについては，殆んど発展的検討を加えることができなかったが，現在日本では広島大学の森楙さんが遊戯に結びつけて展開しておられるし，また上述したように三角君がその宣揚のたみに全力を尽した。また北原歌子さんの Moreno 流サイコドラマも Mead の考え方の延長線上にある。

6. 筆者とお近づき願った方々，とくに本稿の中にご登場頂いた方には，お礼を申し上げる。こういう関係の中で筆者のささやかな仕事はできたのである。但しお名前を出したことがご迷わくになった方は，お許し願いたい。

慶大医学部内科の客員教授小沢幸雄博士には，別に感謝を申上げる。(1985/6/26)

〔附録〕

メソン・ド・クールの保育

メゾン・ド・クールの保育は筆者の考え通りでいいということで，次に述べるような保育をした。近頃では自由保育というのでしょうが，そんなことはどうでもいい子供に自己教育をさせるんだ！ という理念で保育した。少しずつヒントを与えることを別にして，子供たちに好きなようにさせる。ただ危険防止には注意を！ ということだけであった。次に引用してあるのは，当時メゾンで出していた情報誌 NL というものからの転用である。自分のやった保育はこれでよかったと思っている。ただし小，中学校でもこれと同じようにやるかどうかは，別問題である。

園も一昨年秋に開園してから1カ年余りになりました。私なりの理念と主張をかかげてスタートしたものの，いつも，園児はどうなっているであろうか？ 教育の効果はどんなであろうか？ と気になっていました。今度，第一回目の卒園生を出すについてこのことを取り上げて反省してみたいと思いました。この結果は母親講座でお話いたしますが，同時にこの紙面でも簡単にふれてご報告をしたいと思います。端的にいうと，子供たちは期待の線に沿って伸びています。社会性と運動能力の二つの角度を取り上げて見たいと思います。これは，お子さん方一人一人について，毎日観察し，毎日記録を取っている資料に基いた考察であります。

(1) 社会性は，これを自律性（独立心・人に頼らないなど），自制心，協調，指導性（親切，援助等を含む）に分けて，園児の発達の有様をみて参りました。はじめの一，二カ月は，大部分の子供は，自制心も自律心もありませんでした。自分のことが全部で，これを無理にでも押し通すことしか考えていませんでした。まだ子供たちは，先生に頼んでは何かをしてもらおうとしました。ほかの子供がいても，話しかけもせず，一緒に遊ばない子供でした。それが三カ月，四カ月となるにつれて，自

分のわがままを抑え，人に話しかけ，一緒に遊ぶ子供になりました。

田村京子先生が，本稿の中で書いておられることをごらん下さい。別の所に書いてありますが，その中からここに一部分だけ引用します。「朝の登園時。お互いに名前を呼びあって，おはよう！　の一言。恥ずかしがり屋の男の子は，てれながらも，ちょっぴり怒った口調で，おはようと返事をする。友達の欠席にも必ず誰かが気づき，心配する。元気になって登園するとみんなが声をかける。朝から元気のない子供も友達からの言葉で，みんな遊びに入っていく。冬休み明けなどは，とにかく賑やかで友達の顔を見ただけでうれしくて笑いが絶えなかった。」これは私の期待以上でした。しかも私達は，子供たちとの間に，朝おはようをいう習慣を始めただけでした。子供は一寸ヒントを与えるだけで，または，して見せるだけで，ちゃんと何でも覚えます。そして遊んでいるうちに，更に発展させます。子供たちの自己教育能力によるものです。余所に行ってみて，またもっと大きい子供たちの有様をみて，子供たちの間にこれだけの親しい雰囲気があるかといいたくなりました。

ある幼稚園での風景。(A) 4歳数カ月の女の子。朝，登園して下駄箱で上ばきにはきかえるが，部屋に入ってみんなが遊んでいるのに，一人で立っていて遊ぼうともしない。(B) 子供たちは，先生に言われて，はさみを持ってくる。そこではさみを使おうとしたら，「まだ使わないの。おりこうして，待っていて下さい」と言われる。こういう保育は子供の自発性をうばうことになります。(C) 先生「ハブラシをカバンから出しなさい」，といっても子供は座っていて取りに行かない。また一人で外に出ようとするが，入口に立ったまま靴にはきかえようとしない。みんなが靴をはきかえるのを見ている。

うちの子供たちは，みんな自分で靴をはき，自分で何でもします。(2) 社会性は，片方で自律性，自制心ですが，他方で他人への顧慮，親切，指導協調の形をとって現われてきます。これもメゾンの子供たちに出来上っています。片づけになると，逃げる子供がいましたが，今は逃げなくなりました。また，他の子供が，その子供に注意して一緒にさせるようにしています。先生が口をはさむことは殆んどありません。また大きい子供が小さい子供の世話をちゃんとしています。子供たちは，お互いに接触して仲よしが出来て，よく遊んでいます。それが時によると，友達にやられるとやり返すことができるようになりました。今まではやられては泣いていた子供でしたが，今は毅然として，やり返しています。強い個性が出来上りつつある証拠で，これは，協調性，指導性とともに大切な性格の一面です。(3) 私たちは，子供たちの心身の健全な発達を求めています。その為に，子供たちがメゾンで，うんと動き廻って遊ぶことを願っています。ところが子供のための充分な遊具があるためか，私たちは何も言わないのに子供たちは自分から進んで自分の好みの遊具に飛びついていきます。ロープネットに乗り，いわゆる「坂」に登ったり降りたり，クライミングハウス（これは米国産です）に飛びついたり飛び降りたりします。まあ，その元気なこと！　積極的なこと！　そして喜びに溢れていること！　私たちは満足しています。こうして子供たちは始め無器用で臆病であったものが，日一日大胆になり，思いきりがついて，ロープネットも，クライミングハウスも，だんだん高い所に登ります。そして躊躇の末，高いところから飛び降ります。ふんぎりと勇気がつきました。体力，運動力はもとよりのこと，精神力も強じんになりつつあります。これについて，保育者は子供への危険を防ぐために，ついて廻るだけで，何をしなさい！　とは決していいません。子供が自分で決め，自分で決断し自分で実行することを見守るだけです。上の写真をごらん下さい。これは子供たちが考えついて始めた汽車ごっこです。なわばしごの上に，箱を置いて，汽車ごっこをしている姿です。愉快そうではありませんか。これはみんな子供たちの創作です。箱を持ち出して，なわばしごの上に乗っけたのも子供。汽車の絵を，どこかから探し出して持ってきたのも子供たちです。ここでは保育者の手は全然加わっていません。このほか，子供たちは，毎日メゾンで何かしら創造しています。この工夫と努力こそ，子供の知性と創造力を伸ばしています。将来子供たちが生活に於て，勉強に於て，仕事に於て，創造性のある人になることを期待しています。物を工夫し，努力するところに，頭は伸びて，物をあみ出す力が伸びます。知性が伸びていることは見ていて確かですが，これは四月までに何とかしてたしかめるつもりです。言葉もかなり伸びました。一向にしゃべれなかったお子さんが，かなりしゃべれるようになりました。うちの子供だけを見ていないで，ほかの子供を見るとこのことが分ります。

先日「お母さん」という雑誌が，メゾンを取材して，写真を載せ記事を書いてよこしました。そして「メゾン・ド・クールは，遊び派(知育派に対して)の頂点である」と書いていますが，有難いことです。ここで，子供たちは遊びを楽しみ社会性を育て健康と体力を伸ばしてくれば，目標に近づきます。各家庭から持ちこんだ，沢山の悪いくせも，ある程度掃除が出来つつあります。「お母さん」誌の記事は最後に，「積極的に遊びに取り組

んだ子供たちが，どのように知性，社会性を伸ばしていったか―結論をみるまでどうか（保育を）続けて欲しいものだ」と結んでいます。その通り，私にとっても自分の理想と教育観が，どう結実するか？　は最大の関心事です。しかし必ずうまくいくと信じています。今この一年の保育効果をふり返ってみて，この信念は更に勇気づけられました。知性だって，正しい伸ばし方をしていることはまちがいありません。

運動能力は幼児の発達上，非常に大切なものです。社会性の発達にも，知性の促進にも，自信，精神力の促進にも関連があります。今その実例をいくつか抜いて見ましょう。メゾンで観察したお子さんたちの運動能力の発達の有様を一，二の実例で取り上げてみますと，K君は，はじめ靴がはけなかったのが，二カ月目で靴が半分はけ，半分だけで歩いていたが，三カ月目で両足とも着脱できた。二カ月目に箸が握れず手で食べていたのが，九カ月目で箸を握って食べるようになった。一カ月目に平均台を歩けなかったのが九カ月目には平均台をゆっくり歩いている。スキップができ，ロープネットに乗ってゆられ，カスタネットでリズムが打てるようになったこのお子さんは，今ではメゾンでキャッキャッ喜んでいる子供である。はじめ直ぐ泣いていた，独りぼっちの子が今は立派に社会性を身につけ喜びと満足を体一ぱい現わしている。C子ちゃんの場合は，箸は最初から握ることが出来，ボタンかけも出来たが，シーソー，ロープネットは六・七カ月で積極的に取り組むことが出来，平均台も九カ月で歩けるようになりました。この子ははじめから姉御的なところがありましたが，体の動きがよくなると共に，一層，こういう親切ぶり指導性が伸びて，今では新入の子供について廻って世話をし，小さい子供がじゃまをしても，怒らないで抱っこしています。また四人でけんかごっこをして楽しそうに遊んでいます。

もう一つ。「えぬえる」の前号でも一寸書きましたが，秋の運動会の時に，子供たちはメゾンでは何の練習もしていないのに，子供たちは声をかけるとすぐ集ってきて，並ぶことが出来ました。予期もしなかったことでした。余所では，運動会の為には相当の時間，練習と準備を重ねるのが普通です。教えなくても身につける能力，これが私のいう自己教育能力です。紙数の関係でもうよしますが，メゾンの子供はすくすくと期待通りに伸びています。社会性も運動能力も言葉も知性も伸びています。しかも教師が先に立って指導することなしに，子供同志で遊びながら伸びています。年齢の伸びと体の伸びによる影響も，勿論ありますけれども，メゾンの子供たちの伸び方は，普通以上でメゾンの生活の中でごく自然に促進されているものです。期待以上の伸び方です。みなさんと一緒に喜びたいと思います。最後にご卒園のお子様方のこれからの，ご健康とご成長を心から祈り期待しています。